

目的 肢体不自由者の体温調節反応については、その末梢血管収縮反応の欠除、発汗障害、体温の環境温への依存、温冷感のズレなど、著しい機能低下が認められている。今回は、肢体不自由者の日常生活における環境温度条件と着衣、温冷感等の関係を実態調査し、着装上の2、3の問題点を見い出したので報告する。

方法 調査対象は、国立身体障害者リハビリテーションセンターに入所中の男女約50名（16～52歳）、障害の内訳は、脊髄損傷、脳性麻痺、ポリオ、その他である。調査は毎月1回とし、調査項目は、環境温度条件、着衣内容、着衣重量、着衣順位、温冷感、快適感などで、調査期間は、昭和55年6月から、翌年6月までに渡った。

結果 1. 肢体不自由者の着衣は、Tシャツ類やトレーニングウェアが主体で、着用品目が少なく、衣服重量の平均値、標準偏差ともに健常者群に比較して季節的変動が小さい。2. 着衣量と温冷感、環境気温との相関性が健常者群より低い。3. 全身の温冷感と局所温冷感とのアンバランスが認められ、皮膚知覚麻痺部に冷え感を申告する者が多い。4. 全身の温冷感、あるいは湿潤感と快適感が健常者に比べ一致しにくい。5. 一般に、温熱的快、不快が行動的体温調節の動機づけとなり、着衣の調節を行わせている。しかし、上記の結果は、肢体不自由者において、それらを担う温度感覚受容が不完全であるため、行動へのフィードバックが充分行われていないことを示している。また、肢体不自由者の関心は、衣服による気候調節よりも、着脱の容易性や運動機能性に集中しやすいことも、環境に適した着衣の選択、維持が行われていない原因と考えられる。